

† HAPPY EASTER †

2017年4月18日(火)
つのぶえ保育園(石田)



Easter(イースター)は『復活祭』とも言われる、キリスト教の行事の中でも 最も盛大にお祝いされている大切な記念日です。2016年前、イエス・キリストは、イスラエルのベツレヘムという町外れの馬小屋で、信仰深い処女(おとめ)マリアを通し聖霊といわれる神様の不思議な力により、この世にひっそりと誕生されました。(この出来事を覚えて感謝し、礼拝をささげる日が『クリスマス』です。)命を狙われ、一度は隣国エジプトに逃れていましたが、その後は 両親と共にナザレという片田舎に戻り、ダビデ王の末裔となるヨセフの息子として 大工の仕事を手伝いながら 人としての時を平穩に暮らしました。(=私生活)やがて30歳になられ、神様からの召命を受けたイエスさまは33歳までの3年間を、神さまの働きのために費やされました。生まれ育った土地や家族から離れて、様々な場所へと巡り歩きその間、大勢の人達と出会い、その1人1人に神様の愛を示され

優しく励まされ、慰め、癒し、労わり、祈り、生きる力や希望を 与えられました。(=公生活)

ところが エルサレムには それを好ましく思わない者達いました。旧くからの法律やならわし地位や名誉や肩書き等にこだわる指導者や、頭が良く人々から「先生」と敬われた学者達でした。彼らは、イエスさまの噂や評判を耳にすればするほど、イエスさまが 自分達の立場をおびやかす存在として疎むようになり、妬みや憎しみ、傲慢や焦り等の醜い思いに振り回されていきました。そしてついには「イエスを殺そう!」という、人としてゆるしがたい計画をするまでに 心が 歪んでしまったのでした。その上 この卑劣な たくらみは、あっという間に 周りの人々までも 巻き込みその勢いは おびたしい数の群衆と化していき、何の罪も犯していないイエスさまを 極刑である十字架にはりつける無責任さにまで エスカレートしていったのでした。この群衆たちの殆んどがついわずか一週間前には、熱狂的にイエスさまを支持し、大歓びで後をついて来ていた者達でした。イエスさまを ほめたたたえた人々は その同じ心と口とで、今度は 憎しみ、あざけり 罵ったのです。まさに 手の平を返したような愚かで弱い彼らの心は、何ひとつ根拠のない 世の噂に流されるままとめどなく暴走していきました。一方で、イエスさまの処罰決定の権限を委ねられた総督ピラトは、イエスさまに直接、何度も尋問を繰り返しましたが、十字架刑にあたるほどの重い罪は見出されず釈放を考えました。ところが、「殺せ! 殺せ!」と大騒ぎする群衆の勢いに負けて、このすべての一切の責任を 民衆に託し、人として最低な『責任転嫁』という手段をもって、人の命にかかわる重要な決断を いとも安易なかたちで 遂行させてしまったのでした。

このように、イエス・キリストが十字架にかかれた原因は、御自身の罪や悪行によるのではなく、私達すべての人間が 本来持っている、心の弱さや醜さ、汚さによるものであったことがわかります。他の人への嫉妬心や劣等感、怒り、嘘や虚栄、陰口や争い、無責任や無関心、無視、暴力、暴言…これらはどれも 私達人間の心に内在するものです。誰にでもあるこのどうにもならない心こそが、たった一つの尊い生命さえも奪ってしまうほどの、取り返しがつかないような深くて重たい罪へと変えられてしまいました。はるか遠い昔に起こった、この十字架の出来事は、自分達の心に対する大きな戒めであり 導きであることを 改めて知らされる思いがします。

そしてとうとう、主イエス・キリストは、この弱く醜い心を持っている すべての人間の代わりに、金曜日の午後、人としての生涯を 静かに閉じられました。イエスさまが十字架上で祈られた言葉に

「父よ、彼らをお赦してください。彼らは何をしているのか自分でわからないのです。(ルカ 23:34)」とありますが、自分をなじる人間たちを 最後の最後まで心配し、人々のために神様に祈られました。涙と共に 息を引き取られた イエスさまの想いは どのような悲しみに溢れていたことでしょうか。他人の罪のために 自らの命を差し出し 引き換えにするなどという行為は 私達人間には 誰一人決して出来ないことであり、逆に 自己保身のための正当化をしたり、必死な自己弁護や 自己憐憫、或いは開き直り、自虐的 排他的など哀れな姿を見せてしまうのが人間なのだと痛感させられます。

それから後、それまでずっとそばで尽くしてきた弟子達や身近な者達は、大きな悲しみに暮れて イエスさまの遺体をお墓の中に 丁寧に葬り、大きな喪失感の中で 不安や絶望感に襲われながら安息日にあたる土曜日を 1日中 何も出来ずに 時を やり過ごしました。

悲しみの金曜日から三日後、待ち望んだ日曜日の朝が明けると同時に、女の弟子達がお墓参りに駆けつけると、お墓の入口の大きな岩が取り除かれ、中に入ってみると 遺体を包んだ白い布だけが残されているのを見つけました。この有り様に茫然とし嘆き悲しんでいるところへ突然 現われた天の御使いから『彼はここにはいない、生き返られた』と告げられました。そこで 急いで仲間のもとに戻り その出来事をありのまま 伝えたのでした。話を聞いた他の弟子達は 当初、この事実を即座に受け入れることが出来ませんでした。その直後 手の平の釘の跡や お腹の槍の跡を見せて死んでよみがえったその証を示されたイエスさまの姿を 目の当りにして、主の復活の事実を 信じおそれ 驚きながらも 喜びに満ち、この時 初めて『神の子キリスト』を確信しました。

(新約聖書 『マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ福音書』記述より)

キリスト教は、イエス・キリストの この復活の出来事によって 始まった宗教といわれています。その意味でも、『イースター』は 最も意味の深い大切なお祝いの記念日であり、クリスマス以上に『信じる』ということについて、私達人間の心へ まっすぐに問いかけてくる出来事だと思います。また、死という暗闇を超えた生きることへの希望と信じる喜びを 感じ合える時であると思います。

このイースターという祝日は、クリスマスのように 日にちが固定された祝日ではありません。
【毎年 春分の日後の満月の夜の 直後の日曜日】とのルールで決められている『移動祝日』です。
そのため、今年は 4月16日(日)に 全世界のキリスト教会で イースター礼拝が行われました。つのぶえ保育園では、先週の14日(金)に、イエスさまが十字架にかかるまでの出来事を覚え『受難礼拝』をまもりました。「イエスさまは どうなっちゃうんだろう…」と、悲しみの出来事にうつむいていた子ども達でしたが、一転、今朝は その後の よみがえりのイエスさまの様子に喜び、穏やかな嬉しさの中、全員で 復活のお祝いの礼拝をささげました。

神様の子どもが 人として生まれ、人としての生涯を送られ、人として死なれ、そして、人には決して出来ない＝死から よみがえられた『復活』・・・ここに神と人との明確な違いがあります。この、イエス・キリストの復活の出来事は、私達の死は決して終わりではないことへの希望です。イースターを通して、神様は人々に、命は神様から与えられていること、神様はどんな時も 常に生きて働いていること、それを信じることへの心の安らぎ、そして、命を与えられている者同士が 愛し合って生きること、神様の愛に立ち返ることへのメッセージが注がれているのだと思います。子ども達は皆『イエスさまがもう一度生まれた(生き返られた)』というその事実を ありのままに受け入れ、その不思議な出来事の話をとて真剣な表情で耳を傾けていました。世界中の人達が イエス・キリストの復活の出来事と神様の愛を信じる事ができますよう、祝福をお祈りします。

キリスト教の教会や施設等ではイースターをお祝いして『イースター・エッグ』が配られます。これは、硬い殻に包まれている卵は一見死んでいるように見えるけれど、やがて新しい命が生まれその様子が、まさに 死という闇に打ち勝つ“復活”というイメージに重なったと言われています。今年も ささやかですがプレゼントお贈りします。お子様と 一緒に お楽しみ頂ければ幸いです。